

諏訪 恵信 氏の学位審査結果の要旨

主査：湊 直樹

副査：西山 利正、野村 昌作

感染性心内膜炎は、心内膜に細菌集簇を含む感染層（疣腫）が形成され、菌血症・塞栓症・弁破壊をおこす炎症性疾患である。診断や治療技術が進歩しているにもかかわらず、これまでの報告では過去数十年間にわたり感染性心内膜炎の治療成績はあまり変化していないとされていた。

そこで申請者らは、より近年のコホートにおける院内死亡率とその予後予測因子について検討するために、2006 年から 2019 年に関西医科大学附属病院に感染性心内膜炎で入院した患者を前向きに調査した。

連続 137 症例の検討から、院内死亡率は 13%と依然高値で過去の報告とあまり変わらないことが明らかになった。また、感染性心内膜炎の院内死亡を予測する独立した因子として、入院時 CRP 高値と維持透析患者であることが抽出された。過去の報告と比較して、年齢の上昇、基礎疾患（糖尿病、維持透析、悪性腫瘍の既往）合併頻度の増加、起因菌の変化が認められており、これらが院内死亡率の低下がみられない理由であるものと推察された。

本研究は、感染性心内膜炎の最近の院内死亡率とその予測因子、さらに患者背景の変化を示した研究報告で、その臨床的意義は大きく、学位授与に値すると考えられた。